

秋のすきまで

僕等は

葬式の朝が

曲った睡気を誘うように

葬式の夕暮れに

黒ヴェールの君等に

声をかけるわけにはいかない

赤ずきの

マツチ売りの少女が商売を始めても

僕等は

三角巾を振る

血が流れずに

リンパ液が滲む

そんな闘いを続けて

満月を抱く

新月の空の下で

僕等は

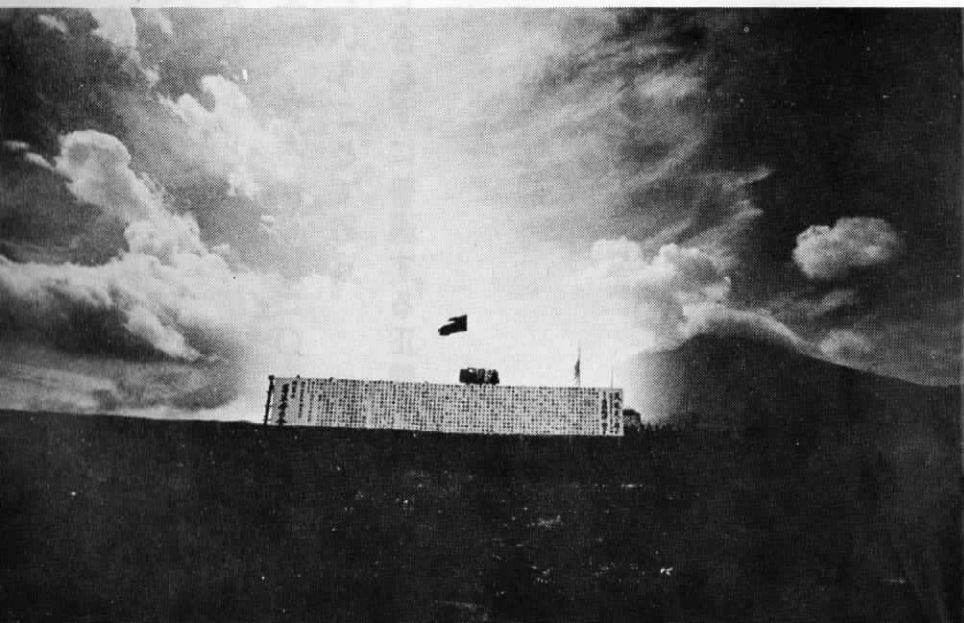
冬用オーバーを探す

(一九六六年)

(筆者は当時早大文化
団体連合会常任委員)

第四章

静寂は きなくさく



砲声、銃声の絶える間もなく、人はいつも地球のどこかで殺し合い、正義を叫ぶ。

ここには「内灘射撃場—金沢一九六一年」という詩があるが、いわゆる内灘闘争は、詩の副題から七年前、現在からは二〇年前であった。内灘はやんだが、しかし——ということである。

転廻し生成する現実のなかで、殺し合わずに普遍する正義を求めて。

一枚の報道写真

■真島 憲治

時間の流れの外で

凝縮され

大脳のひだにしみこんだ

一枚の報道写真。

冷たい石を握りしめ

自分の肉体を

弾きだそうとしている一人の活動家。

橋の上に散乱している

口を閉じた 堅い卵。

今日も、
羽田では 肉を刺す金属音が
すべてをかき消していく。

中間総括(N+1)

■真木徹

回転しながらせり上る
沖縄斗争の照り返しの中
本土労働者・本土「労働組合」の
94時間のベースアップストライキは
自己催眠による眠りの床で
ついに 重さがない
かし

己れの生を切りとつて子供と格闘する妻に保障された眠りは眠りきれぬ俺の胃袋の底にドーンと重い

妻 22才の冬



〈共同生活〉を自立した営みの〈拠点〉にしようとおんなの〈差別〉の場にしまいと
そして

共同生活の箱の中で共鳴したのは

〈何〉と〈何〉だったのか

資本の「赤い羽根」以上の〈赤さ〉を燃やさぬなら

解体させるべき たがいの論理を

今はつきりさせよう

〈敗北〉さえもまた

勝ちとることなしに手にすることは

できないのだから

寒の入りの透きとおった空を眺めながら

妻の割れた肌を 手探る

艶やかな弾んだ輝きを やっぱり

犠牲にさせてしまった という感傷が

ふと 「組合」の腕章を通して

俺の血管をしめ上げる

しかも



〈他人〉の存在にまで〈責任〉をもとうと

俺は妻に 言うのだ

国家放送の鉄塔は

庶民の屋根をこえて なお

快晴の宙に 高い

飼いならされて だが

労働者の血は〈赤い〉

生きることをやめない労働者二人

妻と 夫の

〈共同生活〉

自立の乳児期は過ぎたのかも知れない

俺たちは

歩けるようになったのかも知れない

また 転ぶために

さらに 遠くへ行くために

妻N 27才

(一九七二)

菊の紋章一九七一年

■山岸 重治

菊の紋章が通る道は

どんな田舎でも急ピッチで舗装され
みにくいものをおおいかくした上を
秒ぎざみのスケジュールに追われ
メッキでよそおう民の暮しに聖なる満足が行く

東京——広島

菊の紋章にはそれ程遠い道のりであったか

一九七一年四月

原爆慰霊碑からの

“父をかえせ” “母をかえせ” “人間をかえせ” の声は
聖なる耳には達しなくとも

じつと見守る民衆を呼び続けた二十五年

二十五年前閃光の下で焼かれたのは人間であって

葉山の邸ではない

植樹祭の寄り道であれば

原爆資料館に残る怒りと恐怖のあかしからも

すでに消し去られようとするコンクリートに焼きつい

た人影からも

目をおおわれて

感激に身をふるわす選ばれた者達にかこまれ

ケロイドの奥に光る目を背に

逃げるように爆心地から連れ去られた菊の紋章

無条件降伏、敗戦などとは言うまい

聖断！ 聖断による終戦

聖断により民はすくわれたと

わめく声が電波にのり

輪転機はマメツする程「聖」なる文字を紙面にたたき

出した

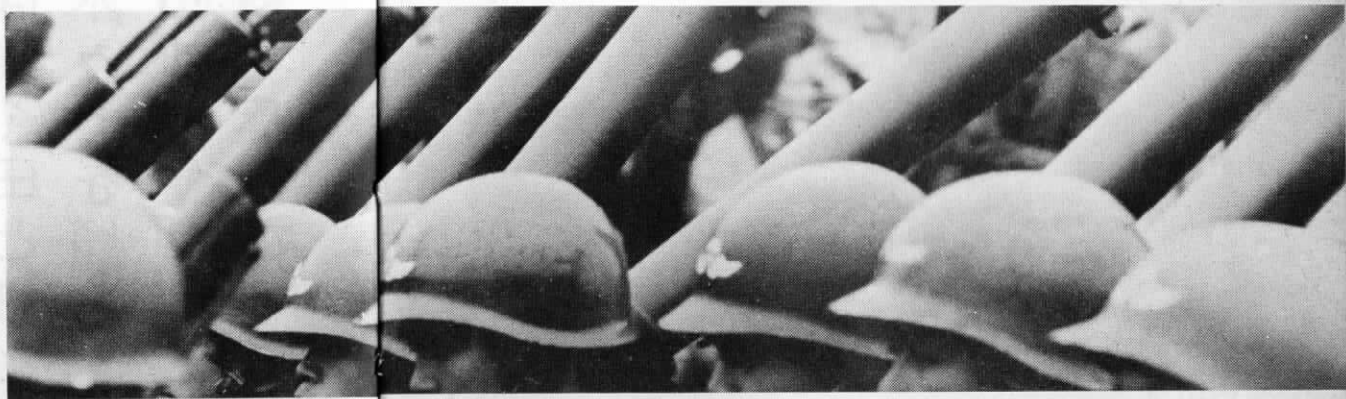
聖戦という活字は人知れず日本海溝の底に沈められ

水漬く屍、草むす屍と共に帰っては来ない

天に押し上げた者達に操られ

象徴の仮面がはげた菊の紋章を背負った男は

現人神への階段を人形の足取りで再び天に向って昇る



父の日記

■北川 清

ちちは日記にしろした



へ十五日陛下の御放送を拝す。
正午。太陽は強く田と畑と生
きのこった木々とを照らし、
犬は何も知らずにやせほそつ
て歩いている。それなのに戦

は敗れた。何の異変も自然に
おこらないのが信ぜられない。
夜、月こうこうとひかる。

ちちはそれから

うばわれたものを取り返すことはなかった

一日の生活に疲弊し

三人の子供の長い将来を思った

なお二十数年のあいだ

戦火の絶えぬ人類の宿業を知った

けれどこれだけは言っておきたいと

初夏の雨の日、じっと目を見つめながら

ちちは戦うべき相手をまちがった

そしておまえの恋うる人のために

ちちの記憶の前で二十三才のおまえは

生涯銃をとらぬと誓えるか

台所のあとに
お釜がころがり
六日の朝たへた
カボチャの代用食がこげついていた
茶碗のかけらがちらばっている
瓦の中へ 鉄をうちこむと
はねかえる
お父ちゃん瓦のうえにしゃがむと
手でそれを のけはじめた
ぐつたりとした お父ちゃん
かほそい声で指さした
わたしは鉄をなげすてて
そこを掘る
陽にさらされて 熱くなった瓦
だまって
一心に掘りかえす父とわたし
ああ
お母ちゃんの骨だ
ああ ぎゅつとにぎりしめると
白い粉が 風に舞う
お母ちゃんの骨は 口に入ると
さみしい味がする。

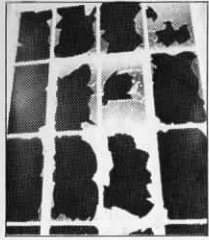
空のシマ ■林 幸子

たとえがたいかなしみか
のこされた父とわたしに襲いかかつて
大きな声をあげながら
ふたりは 骨をひらう
菓子箱に入れた骨は
かさかさと 音をたてる
弟は お母ちゃんのすぐそばで
半分 骨になり
内臓が燃えきらないで
ころり と ころがつていた
その内臓に
フトンの綿がこびりついていた
――死んでしまいたい！
お父ちゃんは叫びながら
弟の内臓をだいて泣く
焼跡には鉄管がつきあげ
噴水のようにふきあげる水が
あの時残された唯一の生命のように
太陽のひかりを浴びる

未来学風のインタナショナルなハブード

■長岡 弘芳

そいつが死ぬるのだというから
勝手に死ぬといったら
そいつは本当に死んだ。
おかげで俺はひどくげんなりした。



それはもう俺が死ぬ三〇年ほど前のこと
だからそいつが死んでから既に五〇年ほどが経っているのだが
俺のげんなりは今でも続いている。

そいつは、俺は原爆症だと説明して死んだのだった。

被爆したわけではなかったのだが

そいつよりはそいつであつたそいつが

必ず被爆しているはずだという。

地球に、世界に、ヒロシマ、ナガサキに原爆が落とされたからには

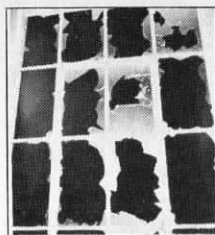
そいつのそいつが被爆したにちがいない

だからそいつの分身であるこの俺が（とそいつはいった）

被爆していないはずはないのだと

そうそいつは言い張って

それでそいつはひだるくなつて死んだのだった。



それ以来俺も何だかひだるくげんなりしつづけて

死んでからもひだるいげんなりはつづいていて

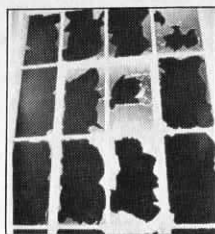
これは死後の原爆ブラブラ病であるのかも知れないなどと思い

あるいは死後の原爆ノイローゼであるのかも知れないとも思い

そいつのそいつの またそいつはこの俺であつたのかも知れない

などとも思つて

この今もひどくげんなりしている次第なのだ。



こうして俺は幾度も首をかたむけ、繰返し確認せざるを得ないので。

原爆症とはすべての人間に伝染する（らしい）

人類はすべて犯される

そこから逃れる道はわめこうがおらぼうがなく

死んでからですらなく

だから例えば俺は

この地の底の冥府の闇で

とうにかたちはなく

にもかかわらず べつたり暗い思念に閉ざされているのだろうか、と。

咲いた日に

■品川 美智子

1

一か月の月給で買えるだけの
チュウリップを買っても
一〇トン積トラック
いっぱい買っても
人々の深いため息のなかに
吸いこまれ
人々の涙のなかでは
色あせてしまった

2

一〇トン積トラック
五〇〇台のチュウリップ
大阪―岩国―佐世保―沖縄
沖縄―ベトナム
四〇〇〇キロ暴走させても
人々はなんのことなく
地名を定規でむすびつけるだけで
先端の花ビラのふるえる音を
聞こうともしない

3

真夜中の公園
鮮血なチュウリップの首が
そこいらじゅうにばらまかれていたら
人々はおののきの目で
春が盗まれた
壊された
明日の公園を嘆くだけで
ちぎれた首の不気味さを知らない

内灘射撃場

(金沢一九六一年)

■猪奥 光愛

「アンちゃん何しにきたがや」

真黒に陽やけたボウズが俺をよんだ

俺は砂にしみた血のにおいをかぎにきたんだ

俺は波にういた胸の高なりをききにきたんだ

俺には闘いのときがなかったから

俺には栄光のときがなかったから

せめて他人の埋めたものでも掘りかえしたいと思って

「アンちゃんこの砂浜で戦争があつたが知つとるがや?」

戦争を知らないボウズが戦争という言葉を知っていた

俺はボウズの見た戦争の跡を見にきたんだ

俺はホコリっぽい車のひびきを追ってきたんだ

俺はボウズの見た戦争さえ知らないから

俺は平和な豚の群に生きていたから

せめて一度でいい大きな声で叫びたいと思って



パウロ六世に小さな叫び

■吉田 正人

叫べばいい
クリスマス停戦を叫べばいい
叫べばいい 十二月だと
キリスト様のお誕生日だと
叫べばいい
叫ばないより

沈黙を守って叫ばないよりいい
と
二三日でも止めろと叫べばいい
しかしもう。。。。
そんなチラリズムはこの世界には
通用しない

その欲望は満されない

か この世界におられないのか

しかしもう。。。

まだか

人間の死の現実

死をかけた偉大な法王の発言は

たとえ平和に戻ろうとも

奇妙な冬の終りは まだか

永久につぐなわれやしない

正義は まだか

もういいかい？

後悔は まだか

まアだだヨ。。。。

しかし まだ

赤や黄色や緑や青や

しかし まだ

そんなランプに照らされて

しかし まだまだ

みせかけの平和を叫べばいい

クリスマス停戦

ただ

キリスト様

それだけの

ねエ、イエス

平和

あなたはクリスマスの日だけし

(一九六五・一二)

国道十九号線沿い

坂下町の森林地帯路面を

銃口を向けながら装甲車が突進してくる

鉄帽の下に緊張した自衛隊員の顔が

装甲車の上 その窓にも

森の向うの部落は既に燃え上っていた

突然 一人の老人が飛出した

上半身裸 素足のまま路端に立ちすくむと

大きな両手を前で合せた

逃げ遅れたらしいその老人の猫背の丸みから

ぼくは思い出した

二十年前に死んだ座光寺の小父そっくりな

褐色の顔

黒いパンツをつけただけのその裸足で

どうしてこんなところをうろついていたのだ

自衛隊の銃弾に

撃ちころされてしまったのかも知れない

骨太な手を合せたまま路端で

砂塵と砲火に

■小池 鉄夫

覚書パート

狂った四月 真昼

泣いている

写真の中央で

縞の布切れて眼を覆った

瘦せた一人の中年婦人が

悲しんでいる

そのうしろ

娘は素足の膝を立て

手を重ねて耐えている

歯をくいしばり

かたく眼を閉じている

左の方に

白い布で鼻を抑えた

おおそれは私の妻

妻に似た女がそこにいた

細い頸が見える

束ねたその髪

眼をはらし 声をつまらせて

悲しみの中に沈みきった

横坐りしている私の妻に似た女も

公民館の真座の上に

男や子供 肉親からひき裂かれて

強制収容された部落の女たちが

虐殺されたという

この夜から朝の間に

翌々日

黒い塊がごろんごろん

濁り切った土岐川を 数珠つなぎに

南瓜のような頭が見え 足が見え

縛られた腕がみんな逆手になって

流れに浮んでいる

すごい死体だ

朝

■金丸 栴一

妊婦がたおれる

産声にならない声がこの

そしてそれが最後だ

砲声が熄み

あさがきつかりあかるくなる

かのじよは両眼をひらいたままだ

なぜかって そんなにはやい死に方があるの
だ

静寂はきなくさく

木にみどりの一葉もなく

めざめるのはその土地の名ばかりだ

ひどくみじかいできごとであつた

夜がしらみはじめると同時に

砲声はおこつた

そしてそれがすべてであつた

硝煙がただよいそれだけ夜明けがおくれた

(個人詩集より)

第五章

労働現場から

WOOLWORTH